

---

# 二人のコンコース

亜蘭 澄士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人のコンゴース

### 【Zコード】

Z0883D

### 【作者名】

亞蘭 澄士

### 【あらすじ】

1980年代初め、大学生活の終わりに別れを告げた後の男女の改めての別れの場面。

六時を過ぎる前に日は暮れてしまい、通称だらだら坂を登る足は重かつた。何度も降りたり上つたりしたこの坂が、今日はとても長かつた。

最後の授業を終えて実習簿を提出して後は結果持ちだつた。教育実習というのは、半分は形式で半分はその意気込みだつた。だからやる気を見せれば大体は合格だつた。単位さえ出れば、卒論を通してもらつて卒業になる。しかし、足は重かつた。

道を誤つたとは思つてはいなかつた。誤るような道は作つていなかつたし、外れるほど道は険しくなかつた。ところが、この坂道を登るのが嫌だつた。登り詰めたところで駅について帰りの電車に乗ると、自分でコースを決定することになる。長いモラトリアムが終わり、大人の世界に入らなければならぬからだ。

どうしても後ろを振り返つてしまつ。すると、坂の登り始めに小さく彼女が見えた。

スカートを履いていたのは、入学式の日以来のことだと僕は知つていた。先生らしい服装ということで、彼女は三年ぶりに紺のスカートを履いていた。髪も段カットをしてみたり、派手なパーマを当てるなど、ジーン・セバーグのようなショートカットにしてみたりしていたが、今はますます眞面目な女子大生に見えた。もともと化粧は嫌いで、リップクリームを使うのさえ好まなかつたが、うつすらとファンデーションをつけた顔は、色の白さをより引き立たせていた。よく彼女の女友達が化粧をさせてくれと言つていたのを思い出した。

その彼女が、足を引きずつて大きな荷物を肩から下げてだらだら坂を登つてくる。彼女も足が重いのだ。僕は足を止めて彼女を待つた。なかなか近づいてこない彼女に少しイライラして僕のほうから坂道を下り始めた。

びっこを引きながら近づいてきた彼女のそばへ行つた僕は、声をかけた。

「足、大丈夫？」

彼女は、その三日月のような薄い唇をすこし曲げてほほ笑んだ。今、彼女は疲れているのだ。だから体力が勝負の実習中に足を挫いたしまつた。彼女は、いつも何か無理をしていた。無理をさせなければよかつたのだ。しかし、いつも彼女と僕はライバルだった。

「かばん、持つよ。」

と、手を差し出すと、意に反して素直に大きな陽に焼けたかばんを渡してくれた。二年ほど前、彼女と一緒に買いに行つたあの革の鞄だった。その時、彼女はその店で小銭入れを僕にプレゼントしてくれた。僕は何をお返しにしたか忘れた。つまり、僕たちの関係はいつも割り勘だった。彼女は、自然に肩に手を掛けてきた。白くて長いがピアノを力強く弾くあの指で少し僕の肩をつかむようにして。こんな態度は初めてだったのでその時の彼女は、よっぽど疲れていたのだ。

二人は何か月かぶりに肩を並べて歩きだした。坂道には僕たち以外学生はいなかつた。実習最後の打ち上げに行つてしまつたのだろうか。

「みんな打ち上げ？」

「知らない。」

今まで一人でどのくらい一緒に歩いたろうか。ちょうど今のような、街が灯をともす時間帯になると、一人はなぜか元気になつた。朝、教室で会つても互いに挨拶などまともにしたこと無い。照れくさいのか、面倒くさいのか、午前中が弱いだけなのか。友達に気を遣うこともなく、といつて拒否しているわけでもない。コンパや飲み会に行つてもはしゃぐわけでもなく、だからといってつきあいが悪いわけでもない。ぶっきらぼうで現実主義で、実は真面目で正直な個人主義。そんな彼女は僕と似ていた。

僕は当時、やりたいことがいくつかあった。ひとつはバンドを成

功させたかった。それは、学外でやっていた。また、映像にも興味があり、たまたま学内のサークルができたので映画制作にも関わった。そこに彼女はいた。

僕は、入学当初からボーカルで美しい彼女が好きだったのだろう。彼氏がいることも知っていた。ロックや映画を語れる友達が一人増えただけでは満足できなくなつた僕は強引に、自分だけの彼女にしようとした。とにかく彼女に振り向いてもらうこと。それも自分のプライドを守つたまま。ロック的な自分を見せればいいと思いつ込んでいた。

僕の思惑通りドライで友達のような男女関係が出来上がつていった。でも、それは矛盾の塊のような気もした。

この街で二人は手をつないで歩いたこともほとんど無かつた。遊園地へ出かけてソフトクリームをほおばるなど通俗的なことは何も無かつた。いつもこの街のどこかのイベントや映画館や深夜営業のロック喫茶で過ごした。ひどいときには同じ映画を同じ映画館で同じ時間に違うシートで観ていた事に後で気づくことさえあった。約束して待ち合わせしてデートの演出に映画を見るのではなく、文字通り、映画を鑑賞するのだから、僕たち二人は。

そのくせ、一人で歩いていて別のカップルの男のほうがいつも彼女を一瞥するのが心地よかつた。彼女の可愛さが自慢だつたのだ。

今日は、少し違うが、混雑してきた駅前の道行く人の好奇の目を僕は楽しんだ。足に痛々しく包帯を巻いた女が男の肩をむしろひっぱるように歩くのは何か滑稽だつた。彼女はうつむきかげんで、にこりともせずに前を見て歩いていた。決して僕を見なかつた。

地下鉄につながる長い階段をひとつひとつ彼女のテンポで降りていつた。列車を待つ間も乗り込んでからも彼女の席を確保してから僕が隣に座つてもほとんど会話はなかつた。今は話題も無理に捗さなかつた。地下鉄のうるさい音だけでなく、いつもは数人の女友達と帰る彼女が今日はなぜ一人だったのかを考えていたので、何を話しても集中できなかつたろうし続かなかつたろう。地下鉄の車両の

向かいの窓には僕と彼女が静かに仲良さそうにぼんやり写っていた。同じアングラ映画を見、同じコンサートに行き、感想をいい合い、あれやこれや企画を考え、おかしなイベントに参加し、同じサークルで映画を作り続けていたことは、二人の行く末を決定してしまった。僕は彼女を愛していた。だから、彼女の好む男になろうと思った。映画の製作でもバンドでも常にイニシチアブをとろうとした。それが、彼女の好む男だったからだ。思想があつて主張があつて必然性があつて。しかし、僕が彼女を論破し説得するたびに彼女は歯痒い思いをし、無口になつていった。

そして、彼女は決められた教職のコースを蹴つて映画界に飛び込んだ。ほとんどの学友が先生になるためのこの学校で、そんなことをする学生は稀だし、第一、他の就職先など何も用意されていない。全て自分ひとりで決めてしまつてから、初めて僕に打ち明けた。脚本家になるために東京へ行く、と。彼女は僕を出し抜き、勝とうとした。

僕は宙ぶらりんの気持ちのまま放り出された。彼女もまた、僕の好む女になろうと努力したのだから。男に頼らない自立した我の強い女。創造的な個性の女。

「私は子供って苦手だし。でも、大学だけは出ておきたかったの。

「一人の変な恋愛はこうして突然破綻した。

彼女に懇願すれば良かったのだろうか。僕はあなたの思想や生き方を愛しているのではなく、その笑うとすこし浮き上がる頬骨や年下の男を励ましてやる懐の大きさやくわえタバコをして歩く姿や僕が買った銀のイヤリングをちゃんと耳に穴を開けてしているところにセックスマピールを感じているのです。そんなあなたがみせる生理不順のときのイライラで爪をかんでいる時や夕立で濡れた髪を拭こうともしない時に手をつないだり抱きしめたりしたいのです。

そんなことで良かつたはずなのに、いい格好しすぎなのだ、僕は。でもそんな男を彼女が愛するだろうか。普通に嫉妬する才能の無い

男を。

結局、僕は完敗しました。それが証拠にバンドも諦めてセンセになろうとしています。

そう言った瞬間、彼女は勝ったと喜ぶかもしないが、自分に負ける男と付き合つ意味はあるのか。彼の何が好きだったのか。と、考え直すだろ？

地下鉄を降りて、ターミナルへ向かう途中、彼女が何か、もうじき口の中で言った。

「えつ。なんて言つた。」

僕は聞き返した。

「何故、もつと早く肩を貸してくれなかつたの。」

「何度も貸したよ。」

それは、嘘だつた。僕はうろたえていた。

「私つてチャーミングでしょ。男がほうっておかないのよ。いろいろ言い寄つてくるのよ。でも、男の言いなりにはならないわ。我がままだから。でも、あなたには期待していたの。頼りうと思つていたのよ。」

彼女は僕の顔を斜め下から覗き込んで、ほつきり言つた。そんなときでも僕は返す言葉よりその口元の歯並びの良さや薄い形の良い唇や少し怒つたような切れ長の目を讃嘆していた。

「よくいうよ、チャーミングなんて。確かに奇麗だけどね。」

馬鹿な二人は、人じみのコンコースで立ち止まつたまま、別れた原因について議論している。

「頼るつていつても君の兄貴の役割はできないよ。僕達はいつも地面に垂直に立つていたんだよ。充分仲よくもしてくつついたけれどね。決して、もたれあつたり支え合つたりできない気がするよ。」

彼女は僕からかばんを受け取りながら、すこし、はにかんだ様に頷いた。

「だから、友達でもいられないのよね。」

ああ、俺はお前を愛して憎んでいるからな。と、言いたかつたが

飲み込んだ。

最後まで自立した一人には、涙など無いはずだ。

「こんなところまでありがと。じゃ、時間だから。」

と、彼女は胸のあたりで小さく手を振つて言った。

「うん、映画がんばって。今度は足挫くなよ。」

何度も、彼女とこんな会話を交わして別れたことか。送つたり送られたりしたものだ。

あらかた、単位を取つてしまつた僕達はもうキャンパスで会つこともないだろう。

ぴよこたん、ぴよこたんリズムを取るようココンコースを少し歩いてからエスカレーターで上つていく彼女の後姿をずっと目で追つていたが、案の定、一度も振り返らなかつた。

やらされたな、という思いと、まだ勝負はついていない、という思いが、胸の痛みの中で交錯していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0883d/>

---

二人のコンコース

2010年11月14日09時23分発行